

『鈴木鎮一バイオリン指導曲集』成立の背景  
-Maia Bang と Elizabeth Fyffe による Violin Method の分析を通して-

The Backdrop of a Formation – “Suzuki Violin School” (the complete set)  
– through the Analysis of Violin Method by Maia Bang and Elizabeth Fyffe –

プロジェクト代表者：伊藤 誠（教育学部 音楽教育講座・教授）  
Makoto ITO : Music Department of Education / Professor

## 1. 研究の経緯と背景

諸外国の特色ある音楽教育法（4大教育法）の一つに数えられる「鈴木メソッド」について、才能教育あるいは母国語の教育法としても知られているこのシステムの独創性を賞賛する研究論文の数は枚挙にいとまがない。しかし、作音楽器の代名詞とされるヴァイオリンを用いて、幼い大勢の子どもたちが生き生きとユニゾンで演奏する現象を、単に驚くべき教育成果と諸手を上げて評価することだけが、果たしてこの教育法の真髄・理念に迫る考察になるのだろうか。

創始者である鈴木鎮一が編纂した『バイオリン指導曲集』（このメソッドで使用されている全 10 巻からなる教則本）の編集過程を辿ることによって、40 代前半の鈴木が、当時抱いていたであろうヴァイオリン教育の理想像に切り込むことが、今回の研究の主たる目的である。そのために鈴木が先行研究として参考にした、大正期からわが国で出版されたヴァイオリンのための教則本をはじめ、彼が最も参考にしたと考えられる（その根拠は、本報告書では割愛する）本稿の副題にもあげた Maia Bang と Elizabeth Fyffe 校訂による、この2つの体系的な指導書を取り上げて、詳細な分析と評価を行うことを計画した。約 10 年の歳月をかけて出版された指導曲集完成の背景を探る一つの方法として、鈴木が著した『バイオリン指導曲集』と両者のメソッドの、システムとしての共通点と相違点を明らかにすることによって、鈴木の中でどの程度意識され自己の教則本編纂のプロセスに影響したのかを推察した。

## 2. 研究の独創性とその成果

当初は Maia Bang と Elizabeth Fyffe の両者の内容分析を中心に行う計画を立てていたが、E. Fyffe の原書の所在を突き止めることができなかつたため、構想の変更を余儀なくされた。Fyffe に代わって、教則本内容分析の対象にしたのは C.H. Hohmann である。ヴァイオリン教育の歴史において、この教則本はわが国でも古くから使用されてきた。鈴木も、帝国音楽学校で教鞭をとっていた時代に著した単著の中で、ホーマンの分析と評価を行っている。

この論考の内容から推測すると、おそらくこのメソッドも十分視野に入れていたことは想像に堅くない。次頁に、三者の特徴を比較対照表の形で著した。ホーマンに比べれば、鈴木が著した教本は Maia Bang の特徴に倣っていると分析できる。しかし鈴木では、読譜を後回しにするため音価の短い音符を多用し、左手のフォーメーションを重視する代わりに調号が多く付いた調（ただしシャープ系）を先行させている。しかし楽曲の様式は、あくまで単純明快な三部形式中心の芸術曲（調性感が確立されていったバロック時代や古典派時代の作品）を多く取り上げている。

子どもの発達特性を考慮に入れながら、聴取法による学習方式を徹底させようとしたねらいが、教則本の内容あるいは学習手順において色濃く反映されている。鈴木がプロの演奏家

をめざす一方で、ヴァイオリン教育に打ち込んでいた当時は、邦人による奏法研究や教授法に関する文献が少しずつ出版された時代ではあったものの、技術レベルや対象年齢に相応したテキストの開発はかなり遅れていた。「メソッド」としての世界的注目を集める以前に、他の教則本の追随を許さない程の、斬新でオリジナリティ溢れるものがこの指導曲集全体に散りばめられていたことが、改めて今回の研究成果として浮き彫りになった。

本研究は2年計画により、今年度（平成 19 年度）も継続して行う。したがってこの研究は、現時点で公表（研究発表）するに至っていない。

	鈴木	Maia Bang	C. Hohmann
巻数	10	6+別巻1	5
教材の主な時代区分	バロック、古典派中心	Bang 自身の作品や編曲の教材が3割を占める	古典派、ロマン派中心
調の配列	シャープ系（長調）重視／ハ長調の作品は僅少	シャープ系中心ながらフラット系も早い時期 (Part Two)から導入	ハ長調からスタート、少しずつ調号を増やす
使用弦の順序	A線、E線が十分慣れたところでD線、G線の順に導入	A線、E線を重視するがD線、G線も台頭に扱う	4弦とも平均にスタート時より導入
Change Position の順番	第3posi.を入念に楽曲中で練習、以後も曲の中で学習する	第3の次に第2、以降第4からHigh Posi.へ	第2 Posi.から順番に第7 Posi.まで学習する
Change Position の導入時期	Volume 4	Volume 3	Volume 3
Vol.1によるstrokeの種類	DetacheやMartele奏法	Legato(Slur)奏法中心、後半からVarietiesが導入される	Legato奏法主体
Bowing 学習上の特徴	部分弓（短弓）重視	全弓（長弓）重視	全弓（長弓）重視
左手のFormation	Formationと音程感覚を連関させるため、システムティックな学習を導入している	鈴木ほどの系統性はないものの導入期のFormationづくりをシャープ系の調に求めている	「読譜」を最優先させるため、このFormationづくりは初心者にとってむずかしい
Methodの理念	芸術曲中心主義	エチュード中心主義	音階・エチュードが中心、Duetを導入期から扱っている
頁数	254	537	143
教材の様式観	三部形式やバロック舞曲の作品が多い	さまざまな様式による作品を扱っている	二部形式や三部形式の作品が多い

### 3. 主な参考文献

- 伊従かなえ、横尾幸子編「才能教育に関する書誌」『塔』18号、国立音楽大学附属図書館、1978
- 佐藤謙三他『絃楽器の實技』（アルス音楽講座第6巻實技篇）アルス、1939
- 鈴木鎮一『バイオリン指導曲集』（全10巻）、1955
- Hohmann, C. H. : Practical Violin Method (Book I - V) Carl Fischer（出版年不明）
- Bang, M. : Violin Method (Part I - VI) Carl Fischer, 1932